

『就実論叢』第45号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2016年2月29日 発行

主体的学びを活性化する反転授業と そのキャリア教育への展開

**Flipped learning as a progressive form of active learning
and its application to career education**

中 西 徹

主体的学びを活性化する反転授業と そのキャリア教育への展開

Flipped learning as a progressive form of active learning
and its application to career education

中 西 徹

NAKANISHI Tohru

1. Introduction

最近、国立大の教育学部、人文系学部に廃止や改組を求める文部科学省の通知を巡って、「文系軽視」といった反論が、日本学術会議や国立大学長会合などの組織から猛然と起こっている。さらに、即戦力の人材を求めて大学の教育改革を事実上主導している企業側の経団連からも「産業界の考えではない」というコメントが出ていて、文部科学省も通知は撤回していないものの、「廃止を求めたものではない」と説明を行っている。

この流れは、元をたどると米国のSTEM重視政策に行き着くのであろう。米国ではオバマ大統領がSTEM（科学 science, 工学 technology, 技術 engineering, 数学 math）の強化を国家戦略として、2兆4000億円の補助金を支出した。STEM重視の大学政策や就職有利の状況で、ブッシュ元大統領を歴史学部から輩出したかのエール大学においても、人文系の学生数は減少の一途をたどっており、逆に理工系の学生は増加している。また、ペンシルバニア州立大学では、語学や音楽の学科を廃止して、新たに40億円をかけて科学技術研究センターを建設した。ペンシルバニア州全体では198の人文系学科が廃止されたという⁽¹⁾。

今年も2人の日本人がノーベル賞を受賞したが、こうした国を支える科学技術を重視するあまりに人文系を軽視する今回の施策は、問題解決能力、コミュニケーション能力等の基礎的汎用的能力の育成や生きる力、社会人力の重要性をうたった2011年中教審による新しいキャリア教育の答申、或は2013年の大学教育の質的転換を求めた同じく中教審の答申とはなぜか逆行しているように思えるのは筆者だけであろうか。

今、大学に求められているのは、人文系を含む学部の自己改革であり、自己改革の結果、時代に則した人材をスピーディーに育成し、また地域や社会の役に立つ存在であることである。この大学としての存在意義（レゾン・デートル）の問い方が、いささか文部科学省として内部統一のとれていない様相を呈しているようでもある。

さて、本稿では、日本語で「主体的学び」と称するアクティブラーニングの発展系とも考えられる反転授業の講義への導入とその成果の紹介、さらに、授業でのアクティブラーニング、PBLやグループ学習等のパフォーマンス型授業の評価方法についての考察、最後に、

このような問題解決型学習・探求型学習といった新しいタイプの授業をどのようにキャリア教育に結びつけていくかという方策について述べていきたいと思う。

2. 反転授業の導入とその成果

従来、日本人は vocational guidance を職業指導と翻訳するなど、外来語をうまく日本語に取り入れていくことで、独自の文化や教育を展開してきた。しかし、昨今の教育改革では、アクティブラーニング、ポートフォリオ、ルーブリック、ラーニングコモンズといったカタカナ用語が氾濫していて、このような言葉をまず駆使できないことには議論が始まらないといった状況がある。もともと明治以降、欧米追従型の改革に終始してきたのが日本の体質であるが、経済成長の低下、グローバル化、情報化、高齢化などに伴う社会の構造変化と不安定化に対応した人材を輩出すべく、今回も、これまで行われてきた米国の教育改革の取り入れを図ったのが、一昨年8月の大学教育の質的転換に向けた中教審の答申であり、さらに、そこには強く日本の産業界の意向も働いている。この答申が出て以来、多くの大学が、単なるFDに留まらない Educational Development というべき教育改革に積極的に取り組んでいるのであるが、上記の理由からその実態には本来の目的との齟齬も生じているように感じられる。

反転授業について少し歴史的に見ていくと、リベラルアーツから始まった高等教育が次第に大衆化すると共に、特に米国ではベトナム戦争の敗北等によって社会構造が揺らぎ、若者と社会との関わりに亀裂を生じたことが、その後の教育改革やキャリア教育出現の契機になったと言われているが、この改革の中で米国では1980年代から従来の講義形式の授業でない学生中心型の教育が進められ、さらに1990年代からはICTの発達と共に反転授業の機運が高まってきた。そして2000年頃からエリック・マズールやサルマン・カーンといった人々の努力で展開された反転授業は、現在はブレンド型授業の一つとして広く世界的に認知され実施されている。

我が国では、バブル崩壊後の景気の低迷による社会の変化等に伴い、高等教育においては従来の大学像を打破すべく、様々な改革を試みてきたが、1991年の大学設置基準の大綱化によって教養部の廃止等を行ったものの、これに引き続く少子化や大学の増加による入学者の減少と質の低下、社会のグローバル化、高度情報化などの様々なストレスによって、大学の教育の質が低下し大学間の格差が広がったこと、さらに、社会の構造変化に対応できる問題解決能力を持つ有用な人材育成の要請が高まってきたことなどが、主体的学びの我が国での取り入れや潮流の形成、さらに教養教育の再定義や見直し等につながっていると考えられる。我が国のキャリア教育の改革においても同様の流れがみられるが、これについては後述する。

英語で flipped classroom あるいは flip teaching、flipped learning と言うこの反転授業は、教育改革に関わる用語の中では、「主体的学び」と共にうまく日本語に訳されて定着している数少ない用語の例であり、その分、我々には馴染みやすく親しみを抱くことができる。こ

の反転授業は、通常は学校で聞く授業を自宅でビデオ学習して、授業をしていた学校では課題解決やグループ学習を行うという、従来の授業形態を反対にしたような授業方法である(図表1)。前述のようにブレンド型授業の一つであるが、いわゆる大規模公開オンライン講座(Massive Open Online Course:MOOC)とはやや異なる面がある。

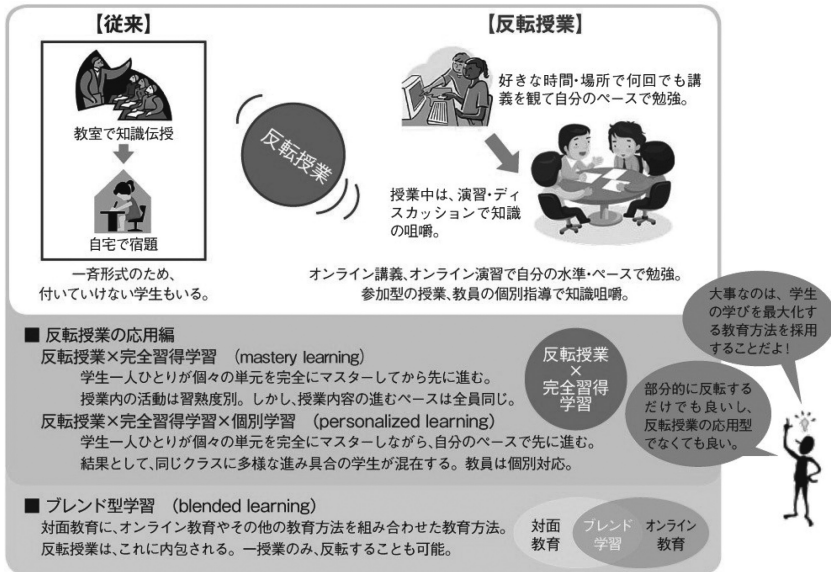
この授業は、個々の生徒や学生の意識をより高めるという意味で、アクティブラーニングの進化型、発展型と言えるものであり、さらにビデオで予習した内容について、教員が個々の学生に指導を行ったり、グループ学習において学生同士で教え合うピア・インストラクション(PI)等を行うことで、より深い学びに到達できる。前出のハーバード大学のマズール教授は物理学入門の授業でこの反転授業を行った先駆者で、ピア・インストラクションを実際に行って成果を披露されている⁽²⁾。また、反転授業のデザインには完全修得学習型と高次能力学習型があり、前者が全員で一定のスキルや知識を習得する典型的反転授業であるのに対し、後者は実際の授業で発展的な課題に取り組んだり視点が異なる者同士でグループを組換えるジグゾーも行う。関西大学の森朋子先生は、実際にこのような反転授業を積極的に進められている。東京大学の船守美穂先生は、カレッジマネジメント(リクルート)や主体的学び⁽³⁾の中で、米国の反転授業の状況について分析されており、最近も、米国のブレンド型授業について詳細な実地調査を実施されている。さらに、帝京大学高等教育開発センター長であり主体的学び研究所の顧問でもある土持ゲーリー法一先生は、海外の教育改革の情報に明るく、帝京大学において、私立大学では最も先進的と言われる教育改革を実施している。ちなみに、上記、主体的学び研究所では、「主体的学び」に関する数々の先進的活動や書籍の出版等を行っていて、筆者は2015年からこの研究所の客員フェローを拝命している。

さて、多くの指摘があるように、実は、反転授業で一番難しいのは、講義ビデオの収録よりも、学校でのグループ学習の設計とその評価である。京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代先生は、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の考え方と実施方法について多くの示唆を与えてくれている。「パフォーマンス評価」に有効なルーブリックは、反転授業等におけるグループ学習の評価や、PBLにおける実習、学外活動等の評価にも用いることができる。このルーブリックの設計においては観点・評価項目と評価基準を設定していくが、課題に対する教員の評価を明確に示すことができる真正評価として大変優れている。近年、大学の基本理念、基本目標、実践指針と共に3ポリシー(アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー)を定めて公開することが求められているが、これに加えてアセスメントポリシー(評価基準)も同様に明確化することの必要性が、上述の「質的転換」答申や2011年改正大学設置基準で述べられており、さらに2012年改訂学校教育法では法令に基づく義務としてこのことが記載されている。このような状況下、シラバス等にもルーブリックによる評価方法等を記載する大学が増えてきている。この点についてはさらに後述する。

このような反転授業がすべての講義で成立するのは難しいと考えられるし、専門科目等で

は対面型の授業形態が必要な場合もあり、学生もそれを求めている場合がある。従って、適切な状況での反転授業の利用によって、より効果的な主体的学びが展開できるものと考えられる。

筆者を含むグループは、就実大学において反転授業を推進するために2014年から勉強会を企画し、また実際に筆者自身でも講義に反転授業を取り入れてその成果を検証した。



リクルート『カレッジマネジメント』185号 Mar.-Apr. 2014

図表1 反転授業、反転授業×完全習得学習、ブレンド型学習 (イメージ図)

大学教育においては、特に初年次に学生に学修の動機付けを行って継続的な勉強の習慣をつけさせることはその後の成長に重要である。また、このために様々なアクティブラーニングを授業に導入することがあるが、場合によっては、グループ学修へうまく参加できない学生もいて、必ずしも効果的ではない。そこで、今回、授業をする学校と課題学習をする家庭での勉強を入れ替えて、家庭ではビデオ収録した授業を見て、学校ではグループ学修による問題解決を行うこの反転授業を実際の実習科目や教育科目に取り入れて、学生の反応やその成果について検証した^{(4),(5)}。なお、今回の反転授業は、1年次教養科目である「発想学」(単位数2、1クラス16名)において実施した。これは創造的思考の源について実践を通して探求する科目であり、多面的かつ柔軟な思考と表現力を身につけることができる科目という点でICTの導入に適した科目であると考えている。

教養科目「発想学」における反転授業の導入方法であるが、発想の歴史、事例、方法論の講義および課題説明(約40分)を学校での授業の前にメディアサイト(株)社のレコーダー(図表2)にてビデオ収録し、収録後若干の編集を行ってからクラウドに上げて、学生が URL

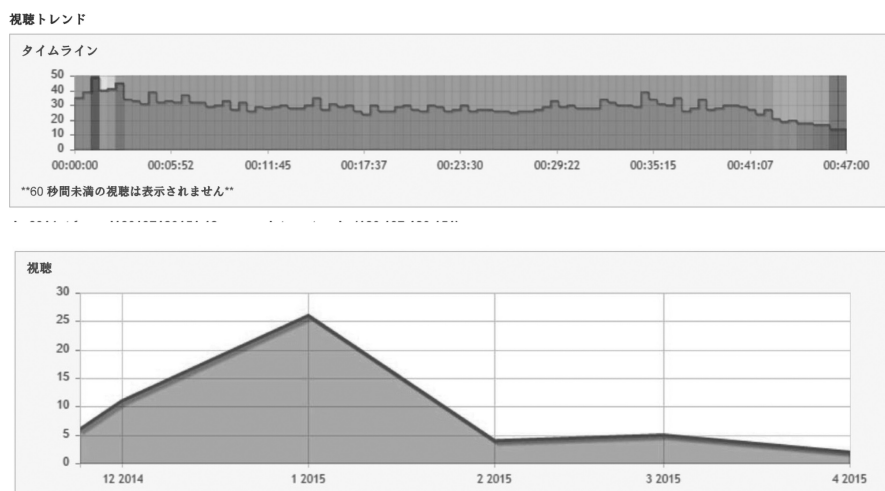
及び ID/PW の入力によって、パソコンやタブレットから視聴できるようにした。このビデオ収録した講義と課題を事前に視聴してもらって、学校の授業では、ビデオで提示された課題の解決を KJ 法等によってグループで行い、その成果を発表するようにした。ビデオを視聴したことはビデオ講義の内容をまとめた要旨を提出させることで確認し、またグループ編成においては、事前に導入試験を実施して、その成績を基にグループ間で学修効果に差を生じないように学生の構成を均質化した。今回のメディアサイト(株)社のレコーダーによるビデオ収録は、講義の様子とスライド画面を 2 画面でシンクロさせるという新しいもので、学生は任意のスライドから何回でも繰り返しスライドと説明を見ることができる。また、このシステムでは視聴した学生の視聴履歴をとることができるので、いつ何回見たか、或は最後まで見たかというデータを取得することもできる。今回は、さらにパフォーマンス型授業の真正評価として、到達度の点数評価とループリックを用いる評価の両面から実施した。ループリックの評価項目は、この授業を受けた学生に提案してもらった形で作成し、学生参加型で透明性のある評価とした。



図表2 レコーダー（上段左）と授業におけるグループ学習と課題解決の様子
中段：KJ法による課題解決と発表会 下段：パッケージデザインの課題解決

今回の反転授業においては、ビデオ講義で、発想の定義、発想の歴史や実例、よい発想を得る方法論などの内容を視聴してもらい、その内容をとりまとめて授業当日レポート提出することで全員がビデオ学習に参加したことを確認した。さらに学生のビデオ視聴履歴を調査したところ、全員が視聴を行っており、1名はスマホ、他はパソコンで視聴していた。内容を早送りで見ただけの学生も何名かあった。また、ほぼ全員が途中で放棄することなく最後まで視

聴を行っていた（図表3）。



図表3 学生の視聴履歴 収録日2014.11.20 長さ46m36s 33IP アドレスによる視聴、
視聴合計22h37m35s、平均視聴時間25m08s 上段：横軸はビデオ上映時間、縦軸は視
聴頻度 下段：横軸は視聴日、縦軸は視聴人数

大学での授業当日では、「よい発想の出し方」「新規Sうどん店舗の出店計画」「就実ケーキのパッケージデザイン」などのビデオで提示した課題に、グループ毎に様々なアイデアを出して取り組んだ。なお、今回、グループ編成のために試験を行ってその構成を均一化したことで、グループ毎のパフォーマンス効率の均一化が認められた（図表4）。各課題についてはそれぞれ発表会を行った（図表2）。学生の評価は、ビデオ視聴内容についてのまとめの評価と記述式テストによる到達度点数評価、そしてグループ学習及び発表会におけるパフォーマンスを、学生が提案した評価項目により作成したループリックで評価した結果を合わせて行った。評価の結果、今回実施した反転授業によって成績はかなり改善をみた。授業でのグループ学習によって、ビデオ学習のまとめでは理解がやや不足していた学生も、より理解が深まる傾向がみられ、最終的なループリックによる評価と点数評価においては全員が高得点を獲得した。特に、導入試験で低得点だった学生の成績は、この授業によってかなり改善をみた（図表4）。この学修スタイルについて学生からは「繰り返しビデオ学習できてよかった」「楽しくてドキドキした」「自分で頭を使って動かないと何も進まないことを体験した」「社会で役に立つスキルが身に付いた」などの感想が得られた（図表5）。さらに「学校へ来るのが楽しくなった」「勉強が楽しいと初めて感じた」という感想もあり、学修の動機付けにおいて今回の反転授業が有効であることが示された（図表6）。

図表4 グループ学習（パフォーマンス効率）の均一化と成績の向上

グループ内でのルーブリックによる評価（8評価項目、5段階評価）

1班	35、32、32	平均33	SD1.41
2班	33、36、38、35	平均35.5	SD1.8
3班	32、35、37	平均34.7	SD2.05
4班	38、31、35、34	平均34.5	SD2.5

導入試験（動機付け・方向付け）と視聴レポート（内化）、確認試験（外化）

学生	導入試験	確認試験	総点	効果
1	72	92	92	+20（1.28倍）
2	84	82	83	-1
3	64	92	92	+28（1.44倍）
4	77	92	87	+10（1.13倍）
5	92	90	82	-10

図表5 ビデオ学習のアンケート結果と感想

ビデオ学習に関するアンケート結果	人
1. ビデオ授業を視聴しましたか？	
・最初から最後までほとんど視聴した	8
・早送りしながら視聴した	3
・一部分だけ見た	0
2. 動画はうまく再生できましたか？	
・できた	11
・問題があった	0
3. 今回のビデオ教材をどのように視聴しましたか？	
・パソコン	10
・タブレット	0
・スマートフォン	1
4. 今回のビデオ教材をどこで視聴しましたか？	
・自宅	10
・学校	1
5. 今回のビデオ教材についての感想は？	
・少しスライドの文字が小さくて見辛いところがあった	
・場面に合わせてBGMが流れていたのでリラックスして見れた	
・発想について関係ある歴史上の人物や作品の説明がよい具合にまとめられていた	
・見たいスライドを押せば説明もそこから始まるのがとても画期的だと思った	
・ビデオだからこそ理解できなかったところを巻き戻し繰り返し学ぶことができた	

図表6 反転授業全体のアンケート結果と感想

反転授業全体のアンケート結果

満足度 よかった8人 まずまずよい6人 普通、あまりよくない、よくない0人
(8-6-0-0-0)

- ・今までなかった授業だった。難しかったが楽しく取り組めた。
- ・実働?が多く実践の中で「発想」を試すことができた。
- ・グループの中でアイデアを出し合うのはとても楽しかった。
- ・箱を作成する時間が足りなかった。

習熟度・理解度 4-7-3-0-0 ・理解しやすい ・目に見えて良くなった

教員の熱意・態度・スキル 10-4-0-0-0

全体的な感想

- ・やったことのない実践形式、授業形式で、こういうことを大学でもするのか!とドキドキしてとても楽しくかつ難しい授業だった。
- ・知識だけでなくそれをどう使うかを考えなければならず、自分が頭を使ったり動いたりしなければ何も進まないことを知った。
- ・とてもおもしろく自由度の高い授業だった。
- ・いろいろな人との意見交換で自分の中にある引き出しを増やすことが大切なのだと実感した。
- ・社会に出ても末永く使える知識・技術を身につけられたと思う。

今回実施した反転授業の過程を以下に示した、エンゲストロームの学修方法⁽⁶⁾に当てはめた各段階を斜体太字で右側に示している。

(ビデオ学習)

- ・講義内容をビデオ収録しクラウドにアップ (約45分の内容)
- ・下記の URL にアクセスして、ボックスに ID とパスワードを入力すると画面が表示される
- ・画面の右上をクリックすると、スライドと説明の2画面で講義を見ることができ、好きなスライドからスタートできる

(授業における課題)

- 課題1 この講義を、学校での授業までに各自で見えて学習して下さい。
スマートフォンでも見ることができますが、画面が小さくなるので、できればパソコンの画面で見の方をおすすめします。
- 課題2 ビデオで学習した内容を A4 1枚程度にまとめてきて下さい
(学籍番号と氏名を記入する)。これができているかグループ学習の際にグ

ループ内で一度確認してから、授業の後で提出してもらいます。

課題3 ビデオの最後にある2つの課題をグループで解決してもらいます。

最初の「Sうどん店の出店計画」の課題はグループで討議し結果をまとめて発表します。結果はシートとして当日仕上げで提出します。

2番目の「就実ケーキのパッケージデザイン」の課題は、実際に作製したパッケージを提出します。これもコンセプトについて発表を行います。

(授業内容)

- 1回目 導入試験[#] (グループ編成の参考。成績には関係なし)
発想法についての演習 (個人学習) *同期付け・方向付け*
- 2回目 レポートの確認 & ビデオ学習内容の確認。ビデオ学習を基に、よい発想をするにはどうしたらよいか討論して発表する (KJ法によるグループ学修)。
内化
- 3回目 最初の課題の解決。グループで討議し、提案内容をまとめて発表する。早く済んだら2番目の課題の解決に入る (KJ法によるグループ学修、発表)。
外化
- 4回目 2番目の課題の解決 (グループ自由創作)。
- 5回目 2番目の課題の発表会。ループリックの評価項目の提案と作成。
確認試験。授業アンケート。 *批評・確認*

最後に、今回実施した反転授業についてまとめると、まず、反転授業はICT教材 (内化) + アクティブラーニング (外化) + 真正評価 (わかった度合いの評価) で行われること、成功のポイントは、まずユニークで学生が繰り返し見たくなるようなビデオ教材を作ること、そして、ビデオ教材とうまくリンクさせたグループ学習等のアクティブラーニングを展開するところにある。脱落者を出さない工夫も必要である。今回、導入試験における成績下位学生の成績は、反転授業によって大きく伸びたが、反対に成績がよかった学生の伸びはあまり見られなかった。今回はいわゆる「完全習得学習型」の反転授業を行ったが、今後、より発展的な「高次能力学習型」の反転授業を行うことで、この点の修正を試みてみたい。またグループ編成において今回は均質型を採用したが、次回は能力別編成を採用することも検討したい。

後述するように、この反転授業においては、自らチャレンジする、コミュニケーションをとる、協調して作業する、といったことが学修過程で求められるが、これは、そのまま社会人基礎力の育成につながる事項であり、これらの点で、今回の授業は新しいキャリア教育に通じるところがある。

3. 見えない学力を評価する見える授業評価

上述のように、反転授業を実施する場合の一番の問題は、ビデオ収録よりも、むしろ学校での授業におけるグループ学習の評価方法である。このようなパフォーマンス型授業の評価において、最も重用されるのはおなじみのルーブリックである。このルーブリックを含む授業評価の現状については、京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代先生の著作に詳しい⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

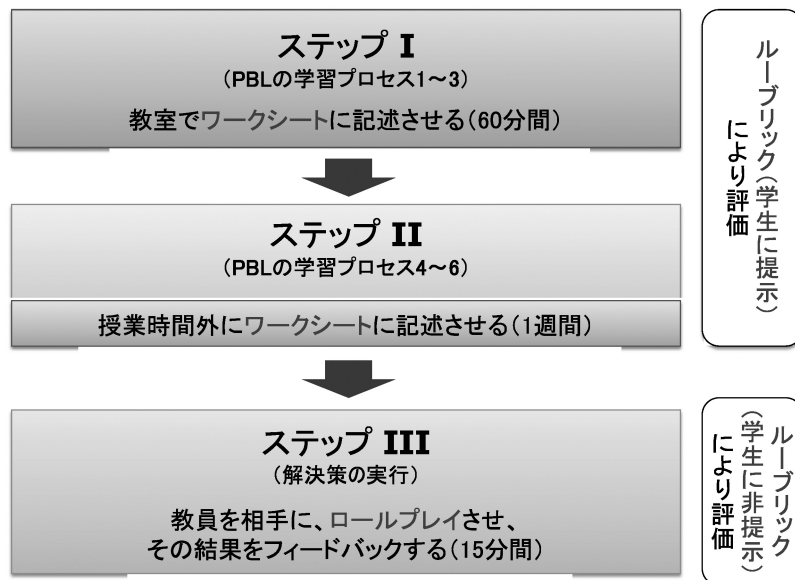
ルーブリックは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、学生が何を学習するのかを示す評価項目と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクス形式で示す評価指標である。真性評価としてのルーブリックは、その外部や学生に対する透明性故に、今後益々授業評価に取り入れられるものと思われる。このルーブリックも、反転授業同様、元々は米国で先進的に開発されたもので、現在、多くの高等教育機関で採用されている。

Rubricという言葉は、一見、固有名詞のようにも見えるが、元々は、説明、題名、尺度といった意味の単語で、授業評価に用いるルーブリックでは、米国カレッジ・大学協会 Association of American Colleges & Universities (AAC & U) で、バリュー・ルーブリック VALUE RUBRIC として開発されたものが有名である。この協会では、「リベラル教育とアメリカの約束」(Liberal Education and America's Promise, LEAP) が進められていて、この中のバリュープロジェクトの一環として、15領域にわたる様々なバリュールーブリックの開発が行われた。これらは学士4年間の長期ルーブリックであり、いわゆる汎用性のあるメタルーブリックとしての性格を持っている。

授業評価の改革が行われているのは米国だけではない。刈谷剛彦の著書「イギリスの大学・ニッポンの大学」⁽⁹⁾によると、英国オックスフォード大学では、講義やチュートリアルの担当者が試験問題の出題者や採点者にはならず、多くの場合、他大学や外部の人間が試験官に任命され、成績評価が行うという。日本では、授業をした教員が試験を行って、半ば密室で採点を行って評価するようなやり方が一般的かと思われるが、アセスメントポリシーに基づく透明性の高い評価が求められている昨今、オックスフォード大学のレベルまで到達するのは難しいとしても、何らかの内部質保証システムに基づく評価が必要であろう。上述のように、学修成果の明示化に関する法令の整備も進んでおり、成績評価方法の改革は急務と思われる。いわば、「見えない学力」を「見える評価」にわかりやすい方法で変換しなければならないのである。

日本でもルーブリックに関しては、様々な工夫が試みられている。上記、松下先生によるe-ポートフォリオとルーブリックを用いた評価方法、あるいはトリプルジャンプと呼ばれるPBLのためのパフォーマンス評価方法(図表7)の開発などは、その代表例である。

改良版トリプルジャンプの構造



図表7 改良版トリプルジャンプ (PBL のためのパフォーマンス評価方法)

他にも、カナダ クイーンズ大学の Sue F Young らが開発した「ルーブリックを超えた」と言われる新しい評価と学修方法である「ICE モデル」を取り入れた広島県の例などがある。ルーブリックにつきまとうある意味の「表現の曖昧さ」を、様々なキーワードを駆使することで補完する ICE モデルは、学校で学ぶ知識 (Idea) の間のつながり (Communication) を、学修と自らの体験等に結びつけて知の応用 (Extension) へと展開していくという主体的学びの方法⁽¹⁰⁾で、現在、日本でも多くの学校や大学で取り入れが始まっている。詳しくは本を参照してほしい。Sue F Young は、昨年来日して、日本各地で ICE モデルの講演を行った。筆者は12月15日に広島文化学園阿賀キャンパス (呉市) で、この講演を聞いたが、コーディネーターの土持先生の導入もあり、本以上にこの ICE モデルの有用性について多くを学ぶことができた。

さらに、ルーブリックとは異なる方法で最近注目されている方法に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach M-GTA) がある。これは1960年に米国社会学者の Glaser と Strauss により考案された GTA を、2003年に木下が改良した評価分析方法⁽¹¹⁾である。当初は看護学において応用された方法で、まず患者へのインタビューや観察などを行って、得られた結果を文章化し、特徴的な単語などをピックアップしコード化したデータを作る。その上で各コードを分類して現象を分析するという社会調査の一つの方法として考案された。これを、現在の学生の評価に応用したわけである。例え

ば、ある大学、ある学部の学生10名程度にキャンパスライフについてインタビューを行う。達成できたこと、満足できたこと、社会に出て役立ちそうなこと、といった具合に聞いていって、これをレコーダーで録音する。次に各人の内容を文章化し、特徴的な語句等を整理していき、これらはある概念、そしてさらにカテゴリーへと整理していく。すると学生がキャンパスライフについて感じていることが、いくつかの概念、サブカテゴリー、カテゴリーとして整理されて、概念図が浮かび上がってくるというものである。あくまで全体の現象をとらえるために考えられた方法であるが、授業の学生が少人数であれば、一人一人に授業で学んだことや感想をインタビューし、これらの内容を文章化して、あるキーワードの有る無し、あるいはその授業で一般的に求められるある概念の有る無し等で、細かく学生を評価することも可能と考えられる。改良版 GTA と呼んでもよいが、このような方法をぜひ一度実践して検証を行いたいと考えている。

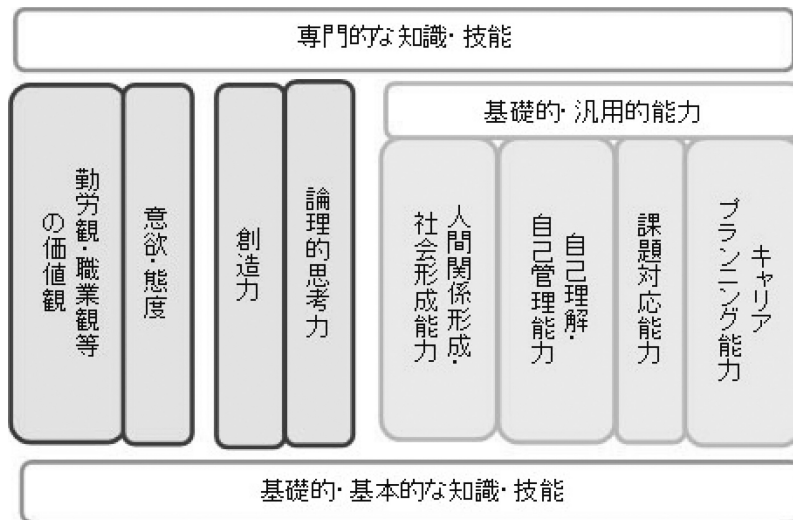
4. 反転授業におけるアクティブラーニングとそのキャリア教育への展開

2項で、反転授業におけるグループ学習等での、自らチャレンジする、コミュニケーションをとる、協調して作業する、といったアクティビティが、経済産業省が定義する「社会人基礎力」の育成につながる事項であることや、これらの事項がいわゆる中教審の「在り方答申」で提示された新しいキャリア教育にも通じることを述べた。本稿の最後に、この点について少し補足をしたい。

キャリア教育は、従来は単なる進路指導や就活指導ととらえられてきた。キャリア教育の歴史を遡ると、確かにこのようなところからキャリア教育がスタートしてきたことがわかる。米国のシンシナティ大学で1906年に始まった Co-op 教育が最初と言われるこの教育は、1977年のキャリア・エデュケーション（キャリア教育）奨励法において、1975年に終結したベトナム戦争で疲弊した若者の社会復帰を促進するキャリア教育として展開されることとなる。我が国においては、1915年に入澤宗壽が「現今の教育」で、米国の vocational guidance を職業指導と翻訳して紹介し、1928年には日本職業指導協会が発足するなどの動きがあり、また、戦後は、1953年に職業指導主事の法制化が行われたり、日本職業指導学会が発足するなどの動きがあり、さらに1957年には、中央教育審議会の「科学技術教育の振興方策」答申において「進路指導」の用語が初めて使用されたという経緯がある。しかしながら、これ以降、好景気と高度成長に湧く日本がキャリア教育を大きく顧みることはなかった。1990年代のバブル崩壊以降、景気が後退すると共に、社会が不安定化し、企業体力の低下や高齢化、さらに情報社会の到来やグローバル化によって、ようやく学校におけるキャリア教育の必要性が叫ばれるようになり、1997年に教育改革プログラムが立案され、文部省、通商産業省、労働省による「インターンシップ推進のための三省連絡会議」が設置された。

1999年には、「接続答申」と呼ばれる、中教審の答申「初等中等教育高等教育との接続改善について」が出され、ここで初めて「キャリア教育」という語句が用いられた。2011年1

月31日には、「在り方答申」と呼ばれる「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」という答申が中教審から出され、これが現在の学校に置けるキャリア教育の指針となっている。「在り方答申」を中心としたキャリア教育については、前文部科学省調査官で現在、筑波大学教授の藤田晃之先生の著書「キャリア教育基礎論」⁽¹²⁾に詳しいが、初等中等教育では、従来の4領域8能力に代わって基礎的汎用的能力(図表8)が求められるようになり、キャリア教育は単なる進路指導ではなくなって社会に出て生きる力を身につけるための教育と認識されるようになった。同様のことは、内閣府のいう「人間力」、経済産業省が検討する「社会人基礎力」、そして厚生労働省が提言する「就職基礎能力」等々、あらゆる場面で繰り返されている(社会人基礎力は3つの能力と12の能力要素からなる)。職場や地域社会の中で多様な人々と仕事をし、コミュニケーションを図り、自己の確立を行っていく、こうした能力は、離職率が高い、スマホばかりを見て過ごしている現代の若者には確かに必要な教育であろう。基礎学力、専門知識と共に、今やこの社会人力を大学生のうちから身につけることを企業側からも要請されている状況で、大学では、単に座学ではない、こうした能力を身につけるための教育・授業をも行っていく必要がある。ここにキャリア教育において、課題解決型や学生参加型の新しい教育が必要になる背景があり、これまで述べた反転授業や学校でのグループ学習など、学生が自ら動いて自ら学ぶ教育の重要性が益々クローズアップされてくるのである。



図表8 基礎的汎用的能力を中心とした在り方答申の体系

5. Conclusion

ICT教材の利用とその振り返り学習の大切さ —内化、外化、そして再び内化へ

反転授業などのVOD教材を用いた授業は、学内で行われるのみならず、今や外部(地域

や受験希望者など)や場合によっては世界にまで発信されるに至っている。しかし、様々な職種で必要とされている理想的コミュニケーションであるアサーティブネスは、こうした画面を見る一方向的な学習のみでは形成されない。アサーティブネスの能力を獲得するためある意味メタ学習者の要素も、単なる VOD 学習では育成できないと思われる。VOD 学習を行うためのタブレット、スマホ、さらに電子黒板、クリッカーなど、様々な ICT 機器が各所で導入されている教育現場において、欠けているものは自己を見つめて振り返る時間とその力であるように思われてならない。先日、就実大学同窓会講演会で齋藤孝さんが、聴衆に繰り返し声に出して覚えさせていた言葉に「コメント力」「要約力」「質問力」といった語句が並んでいた。これらはみなアサーティブネスを潤滑に進めるためのスキルであることに本稿を書きながら筆者は気付いて、齋藤さんが言いたかったことを今になって得心した。学習したことを振り返って再び内化する、このことが自己への注意や他者への注意を高めることになり、結果的にアサーティブネス、ひいては社会人基礎力の育成にも役立つのではないかと考えて、これをきっかけに、今後さらに主体的学びの新たなステップを展開していきたいという展望を述べて本稿を閉じたいと思う。

参考文献

- (1) 大学改革 グローバル競争は何をもたらすか Global Debate WISDOM 2015.8.27
- (2) 第89回京都大学高等教育研究開発推進センター公開研究会 2014.10.8
- (3) 船守美穂他 反転授業がすべてを解決するのか 主体的学び2号 主体的学び研究所 2014
- (4) 中西 徹 主体的学びへの潮流と反転授業 就実大学・就実短期大学図書館報 22,12,2015
- (5) 中西 徹他 学修を活性化する反転授業の新しい展開 (日本理科教育学会課題研究) 日本理科教育学会論文集 2015
- (6) Y. Engeström 拡張における学習 新曜社 1999
- (7) 松下佳代 学習成果の評価の現状と課題 Guideline 2013.4, 46-49
- (8) 松下佳代「〈新しい能力〉とパフォーマンス評価」科研費 NEWS 2013 Vol.2, 2013.9, 6
- (9) 刈谷剛彦 イギリスの大学・ニッポンの大学 中公新書ラクレ 2012
- (10) Sue F Young 他 土持ゲーリー法一監訳「主体的学び」につなげる評価と学習方法 カナダで実践される ICE モデル 主体的学びシリーズ1 主体的学び研究所 2013
- (11) 木下康仁 グラウンデッド・セオリーアプローチの実践 弘文堂 2003
- (12) 藤田晃之 キャリア教育基礎論 実業之日本社 2014